

第一部 惨劇の後

その映^{ヴィジ・フオン}話が入ったとき、彼女はそれが予期していたものであるかのような気がした。

ひどく映像状態の悪いスクリーンの中で、オーベルシュタイン中将と名乗ったその半白の髪の軍人は告げたのだ。キルヒアイス上級大将閣下が亡くなりました。

『身を以て、ローエングラム元帥閣下を暗殺者から庇われての、名譽の戦死です』

一瞬、相手が何を言っているか理解できず、アンネローゼは数秒間、スクリーンを凝視したままの姿勢を動かさなかった。

唐突に生じた理解が、頭の中に灼熱を生じさせた。同時に手足がさっと冷たくなり、さして冷涼とも言えない帝都^{オーディン}の九月の空気が氷雨をはらんだ。

『当分の間、我が軍はガイエスブルグにて故キルヒアイス提督の喪に服すと同時に、元帥閣下がお立ち直りになるのをお待ちします。伯爵夫人のお住まいは、あらためてモルト中将の手での警護を厚くします。この機に乗じて伯爵夫人のお身柄に危害を加えんとする不埒な者たちが現れる可能性がありますから』

「わたくしに……どうしろと？」

『しばらくは外出をお控え下さることと、お庭やベランダ、テラスなどに出られるのもお控え下さい。我々はキルヒアイス提督を失いました。この上、伯爵夫人までを失うことは、元帥のために許容致しかねますので。いずれ、我が軍は故キルヒアイス提督の

遺体を護送し、帝都に戻りますが、それまではご自重下さい』

『故キルヒアイス提督』、『キルヒアイス提督を失いました』、そして『故キルヒアイス提督の遺体』と。事務的と言うには余りにも淡々と繰り返される、キルヒアイスの『死』を告げる言葉が咽喉を締め付ける。どうして、そんなに言葉を变え、言い回しを変えて繰り返すのか。なぜ、“ジーク”が死んでしまったことを、何度も何度も繰り返して伝えようとするのか……

無慈悲な言葉が胸に突き刺さること、深甚な恐怖を伴って耐え難い痛みが全身を何度も何度も貫いた。青玉の瞳を大きく見開いたまま、アンネローゼは言葉を失って、ただ喘ぐように息をつくしかなかった。

「……分かりました」

ただ、それだけの単語を口にするだけでもありたけの氣力を振り絞らねばならなかった。そして、声は自分のものでないような気がした。

「ラインハルトはどうしています？」

『閣下はキルヒアイス提督に付き添っておられます。目の前でできごとでしたから、受けられたショックも大きかったと推察しますが、立ち直っていただけるものと信じております』

「ラインハルトと話させていただけますか、中将？」

ジークが、キルヒアイスが生命^{いのち}を失ったこと。それは痛み。燃えるような赤毛と感じのいい青い瞳のあの少年。頬を真っ赤にして彼女を見上げていた“ジーク”。ぐんぐんと背を伸ばし、いつしか真摯な想いを込めた視線を注ぐようになっていたあのキルヒアイス。彼を失い、形のない、しかし、自分たち……そう自分^{三人}たちが永久に『あの日』へは戻れなくなることへの痛み。

“ジーク”の想いに気づかなかったわけではない。それどころ

か、彼の想いに応えたがつている自分が確かにいると気づいた時、彼女は先帝フリードリヒ四世の寵姫にほかならなかった。アンネローゼが必死に押し隠した想いを、しかし、フリードリヒ四世は苦もなく見抜いていたようだった。

老い朽ちたかに見える眼窩の底に青白い火を灯したかのような皇帝の目を、アンネローゼはまだありありと思い浮かべることができた。

『そなたの心に、予以外の者があること……これは、いかにそなたとて否定はすまい？』

その言葉に息を詰まらせたアンネローゼに、皇帝はさらに彼女の胸を縫い貫く言葉を継いだのだ。

『予は逝く。そなたは自由じゃ……などと予は言わぬ。予が生きである内も、死してのちも、そなたは予のものじゃ。予が唯一、我がものになりたいと望んだのはそなたのみゆえに……な』

我と滅びをともにせよという皇帝に拒否を示さなかったのは、皇帝のこの言葉に縛られたゆえだったが、それだけではなかった。“ジーク”への想いとともに、アンネローゼは思いもかけぬ自らの心の迷路にも気づいてしまっていたのだから。

オーベルシュタインが『それはご遠慮いただきます、伯爵夫人』と応答したとき、確かに彼女は安堵の息をついていたのを覚えていた。今の自分に、自らの半身を失った弟ライバルトと対峙できるのかどうか、アンネローゼにはまったく自信がなかった。

「中将……」

事務的に通信の終了を告げるオーベルシュタインに、アンネローゼは声をかけた。

「教えてください。キルヒアイス提督は……なぜ、亡くなったのですか？」

『身を以て、ローエングラム元帥閣下を暗殺者から庇われての、

名誉の戦死です。お伝えしたはずですが？』

判を押したような、先刻と全く同じ答えが返ってきた。

「――暗殺者を身近に引き入れてしまったのは、どうしてです？」

『警備の不備です。傍受のおそれがあるので、この通信では詳しくお話できません。後ほど、報告を差し上げましょう。そちらをお読み下さい』

そんなことを訊いたのではない……言いたかったが、言葉は出なかった。答えを聞き、その答えが自身の予測の裡に一致したとしたら、どうすればよいのか。

絶句したアンネローゼに、オーベルシュタインは、義眼から表情のない凝視を送り込む。それ以上の言葉が紡がれることのないを確認したのだろう、オーベルシュタインは一方的に通信を終了する。

ブラックアウトした画面に、アンネローゼは呆然と視線を投げ

☆☆☆

帝国暦四八八年九月五日、かつて『正義派諸侯軍』を自称した貴族連合軍は、ラインハルトに対する無条件降伏を認める文書にサインした。貴族を代表して調印式に立ち会ったのは、ブラウンシュヴァイク公爵家のアンスバツハ准将と、長年にわたりリッテンハイム侯家の家宰を務めていたマックス・ホフマンの両名だった。

そのホフマンが、オーベルシュタインにある密告をもたらしたのは、九日の戦勝記念式典直前だった。

「ヴァインフリート・リーフェンシュタール・フォン・シュミットバウアー子爵中将の命令により、要塞動力炉に複数の極低周波爆

弾を仕掛けた」

ホフマンは補足して、こう告げている。

「ローエングラム侯の打倒に成功した暁には、戦勝記念を称して全貴族をガイエスブルグに集めて後、要塞ごと門閥貴族全員を爆殺。その後、リーフェンシュタール・フォン・シュミットバウアー子爵中将による新たな専制体制を確立する予定だった」

シュミットバウアー子爵中将の名がラインハルト陣営首脳の脳裏に電撃を走らせた。ほんの半月ほど前、すでに崩壊寸前の状態だった貴族連合軍の残兵を糾合し、ラインハルトに最後の一戦を挑んだのが、シュミットバウアー子爵中将であり、彼の妻であるコルネリア・ゲルトルーデ・フォン・シュミットバウアー子爵夫人だった。

間一髪とは取えずに言わぬまでも、キルヒアイスと彼の艦隊がかなりの窮地に追い込まれたのは事実である。ラインハルトをして『すでに人材なし』と言わしめた貴族連合軍の中で、例外的に警戒すべき人物だった。ホフマンの密告が極度の真摯さをもって取り扱われたのは当然のことだった。

戦勝記念式典の警備に当たるはずの兵士の大半が、急遽、要塞内部の探索に当てられた結果として、要塞大広間で行われた戦勝記念式典の警備は異常なまでに手薄となった。わずかに大広間入り口に一人の衛兵が配されていただけだったのである。それも、参列者の携帯兵器を預かる任務の――アン斯巴ッハがブラウンシュヴァイク公爵の遺体を乗せた自走ベッドを伴って、大広間に入ったとき、金属探知機すら用意されていない有様だった。

「ローエングラム侯、我が主君ブラウンシュヴァイク公の饗かたきをとらせていただく」

アン斯巴ッハの叫びが大広間に轟いたとき、余りの驚きが参列

者すべての手足を縛り上げた。オーベルシュタインの進言により、全員が武器の携帯を禁じられていたのだが、その禁令がなかったとしても、間に合うようにアン斯巴ッハを制止できた者は皆無であつたに違いない。唯一の例外としてのキルヒアイスを除いたほかは……

ただ、この時、キルヒアイスの姿は参列者の中になかった。他の列席者同様、携帯武器を衛兵に預けていたキルヒアイスだったが、ラインハルト自らがそれを見咎めたのだ。

「馬鹿だな、お前までが丸腰では、もしもの時に誰が俺を守ってくれるのだ」

「このような式典では、武官といえども武装を解き、ひとしなみに閣下への忠誠を明らかにすべきです。特例をお認めになるのは、覇権の当初からその基盤に亀裂を刻み込むに等しい愚行です」

「出過ぎるな、オーベルシュタイン」

オーベルシュタインからの進言を、ラインハルトは却下した。「わたしが決めたのだ：キルヒアイス、早く部屋へ戻り、銃を取ってこい。式典は先に始めるが、お前の出番までには戻ってきてもらわないと困る」

そして、キルヒアイスは辛うじて間に合った。それが予想だにしない『出番』であつたにせよ。

アン斯巴ッハへの射線の延長線上にラインハルトの姿を認めたキルヒアイスは、とっさの判断で取ってきたばかりの銃をアン斯巴ッハに投げつける。首筋に命中した一撃で、アン斯巴ッハの狙いが大きく崩れ、ハンド・キャノンから吹き伸びた火箭はラインハルトを大きく逸れ、壁面を抉るにとどまった。

だが、キルヒアイスにしても、アン斯巴ッハが指輪にまでレーザー・ガンを仕込んでいようとは予想外だった。キルヒアイスの放った初弾は、正確にアン斯巴ッハの胸部中央を撃ち抜いたが、

アンスバッハの放った一撃もキルヒアイスの胸を貫通した。

「あと五〇センチ近い距離から撃たれていれば危なかったでしょうな」

武器の返却を拒む衛兵を気絶させ、その銃も携えてきたことが、キルヒアイスの生命を救った。素手で格闘を挑んでいれば、確実に致命傷を受けていたに違いなかったのだから。

が、前でキルヒアイスを撃たれたラインハルトが受けた心身への衝撃は大きかった。キルヒアイスが集中治療室から運び出されてきてからこの方、呆然とした表情でその枕頭に佇んだままなのだ。直ちにオーディンに向かって何らかの行動を起こせる状態ではなかったとは言え、彼の回復を待つていれば黄金よりも貴重な時間が無為に費やされる。

一方、事実から言えば、ホフマンの密告そのものは事実であり、十数個の極低周波爆弾が要塞枢要部から発見され、爆発まであと六時間のカウントダウン中であることが確認されたのは、同じ日の深夜だったのだが……アンスバッハの暗殺行に対する陽動だったことは明らかだった。諸将がそれと察したとき、ホフマンはすでに軟禁されていた一室で事切れていた。予め体内に埋め込んでおいた毒のカプセルを使つての自決に間違いなかった。

そして、諸将に対して、オーベルシュタインがある提案を行つたのは、この『ガイエスブルグの惨劇』から二日を経過した、一日の夜のことだった。

帝国暦四八八年九月一二日。

ミッターマイヤー大将、ロイエントール大将、および参謀長オーベルシュタイン中将の連名で、リップシュタット戦役戦勝祝賀会での惨劇と、ジークフリード・キルヒアイスの死が発表される。

先だって、オーベルシュタインは超高速通信でオーディンのリヒテンラーデ公と対面していた。

『それは……なんということだ。何という。せつかく賊軍どもを撃ち平らげたというのに』

リヒテンラーデ公の驚きが装ったものであることなど、オーベルシュタインの目には自明だった。リヒテンラーデ公が、オーベルシュタインからアンネローゼへ当てた連絡をはじめとして、ラインハルト陣営の帝都宛て通信をすべて傍受、解読していることは予想の内であつたし、最初から傍受されることを前提に、特に防護を施していない通信回線を使つてキルヒアイスの『死』をアンネローゼに伝えたのだから。

『ローエングラム侯にはいかがなさつておられる？』

「長年の腹心を失われ、さすがに、直ちには今後いかがするかの判断をなされることもかなわぬご様子。我らは侯とともにガイエスブルグにとどまり、侯のご傷心からの回復を待つ所存」

『う……む。それはさてしもあるべきことであろうな』

「ついではリヒテンラーデ公には、我らに今しばらくのご猶予をいただくとともに、帝都の守りをお願いしたい。賊軍はほぼ平らげ、叛徒どももアムリッツア以来、蠢動を絶やしておる昨今であつてみれば、帝都に差し迫つた危機はないものと考えられるゆえ」

『安んじて任されるがよい。ローエングラム侯にはさぞかし力落としてであらう。ゆるりと静養なさつて後、帝都へご帰還されるよう申し伝えよ』

満面の笑顔の裡に蠢いていた別の表情を、オーベルシュタインの義眼は見落としていなかった。

これに先立ち、オーベルシュタイン、メックリンガー、ルッツを残し、ミッターマイヤーとロイエントールに率いられた二万隻

以上の高速巡航艦隊がガイエスブルグを発した。彼らがオーディンに到達し、リヒテンラーデ公の一派を根こそぎに逮捕拘禁するのはこの一四日後の九月二六日。

一方、ラインハルト以下、ラインハルト陣営の全員を罷免・捕縛すべき勅命を皮切りとしたリヒテンラーデ公の宮廷クーデターは、キルヒアイスの死の報告がなければ、この前日二五日に予定されていた。

「ラインハルト・フォン・ローエングラムは無二の親友を喪って茫然自失だそう。しばらくはまともに動けまい。もう数日、準備の完璧を期すこととしよう」

その判断が、リヒテンラーデ公とその一派からすべての未来を奪う結末を招き、ローエングラム王朝への道を開いたのである。

「リヒテンラーデ公ご自身には自裁。公の一族の内、女性と一〇歳に満たない子供は流刑惑星への終身流刑。一〇歳以上の男性は全員死刑。対象は、帝国刑法の族滅の規定に基づくが、範囲は四親等にとどめること」

リヒテンラーデ公一族に対する処分の決定を、ラインハルト自身から聞かされたとき、アンネローゼは自らの聴覚を疑った。

キルヒアイスが帝都への帰還の予定が定まった、一〇月初旬のある夜のことだった。

生命こそ別状はなかったが、多過ぎた出血が、事件から一ヶ月を経過してもキルヒアイスを半昏睡の幽冥の中から解放せず、ガイエスブルグからの移送を許さなかった。一〇月に入っようやく容態が安定したとの報告が入り、ラインハルトはキルヒアイスの帝都への移送を命令したのだ。

その準備の最中に、これまで保留してきたリヒテンラーデ公一族への処分を決定したのだという。オーバーシュタインからの要請だった。事件から一ヶ月余。身をもってローエングラム公を救った英雄の帰還を見てまで、処分を保留する理由はなにもない。それがオーバーシュタインの主張だった。

「これ以上、ご判断を遷延されるにあたっては、リヒテンラーデ公が冤罪に問われたのではないかと言いつ輩も増えましよう」

「冤罪には違いあるまい」

「こちらが先手を取らねば、今、獄にあって処断を待っているのは閣下とグリューネワルト伯爵夫人ということになります」

「仮定の話でわたしを脅そうとしても無駄だ」

そんな会話の果てに、ラインハルトが下したのが、『公の一族の内、女性と一〇歳に満たない子供は流刑惑星への終身流刑。一〇歳以上の男性は全員死刑』というものだった。

「宜しいですね？」

念を押すオーバーシュタインに、ラインハルトは言い放った。

「すでに十分な血を流してきた。この上に、リヒテンラーデ公一族の血が数滴加わったところで何ほどのこともあるまい」

ラインハルトはアンネローゼの前で政治・軍事の話をしない。

それは、彼女が西苑の住人だったときからの不文律だった。その不文律を無意識のうちに破ってしまったのは、無事にキルヒアイスを迎え入れた安堵と、そのキルヒアイスの容態が依然として予断を許さない状態にあるという事実から来る心労、さらにはキルヒアイスの遭難に対するリヒテンラーデ公一族への……理不尽と言っている……憤りによるものだったに違いない。

「一〇歳以上の男性は全員死刑？ 四親等まで？ それは……本気なの？」

「本気です」

姉の顔色の変化に、あるいは気づかなかったのかも知れない。グラスに注がれた白ワインを一気に半分ほど空け、ラインハルトは大きく息をついた。

「わたしが幼年学校に入ったのは一〇歳の時でした。一〇歳を越えていけば、一応は一人前と考えていいでしょう。帝国法で族滅と言えば、年齢に関係なく九親等までの全員が死刑です。寛大だと言ってもらってもいい」

「でも……一〇歳の子供がジークのことに……」

「わたしを狙った相手を止めるためにキルヒアイスは傷ついたんです、姉上」

ラインハルトの声がいっになく平板に感じられ、アンネローゼにはっとした。人としての感情を表していないというのではなく、むしろ逆。感情が制御を受けずに暴走しているかのような……

「ラインハルト……ジークなら……」

ここまで過酷な処分をラインハルトに取らせただろうか。思い、アンネローゼは胸に冷たいものを感じる。

キルヒアイスの計報……それが、オーバーシュタインによる故意の誤報であるとは後になって知らされたのだが……に接したとき、アンネローゼはある危惧を抱いていた。ラインハルトの脚は、地を駆け回すためのものではない。天を翔けるラインハルトの脚に伍していけるのはキルヒアイス以外にあり得ない。他の誰もが自分についてこられると錯覚したことが、今回のキルヒアイスの遭難に結びついたのではないかと。

幸いにして、キルヒアイスを他者と同列に扱うという最も愚かしい過ちは、ラインハルトの選肢肢の埒外だったようだったが、それでも危惧は消えていない。

「いいですか、姉上。わたしを狙ったということは、姉上やキルヒアイスを狙ったのも同じことです。わたしを狙った代償が余り

に安く付くというのだったら、姉上やキルヒアイスを狙っても同じことということになります。そうなれば、姉上もキルヒアイスを狙って目的を遂げようとする者が次から次に現れてくる。それを防ぐためにも、これは必要なことなのです」

直接に罪を犯した者についてはそうだろう。しかし、罪もない、ただ血のつながっているというだけの少年の生命を奪うことで身の安泰を図るというのは、無用の恨みを新たに生み出していくだけのことにはならないのだろうか。

心に浮かんだ疑問を、アンネローゼは口にしなかった。何の知識も経験もない自分が、政治や軍事に口を挟んでよい結果がもたらされようはずもない。そうは思うものの、アンネローゼはどうしても拭い去れない曇りのようなものを感じずにはいられない。そう、ラインハルトの足が、いままでのように地を踏みしめていないというのか、あるいはその向かおうとする先が本来あるべきものから微妙にずれているような危うさを感じさせると言うべきか。

「キルヒアイスがわたしの判断に反対するはずはありません、姉上。これが最善の選択なんです」

言い切ったラインハルトの表情が、諫止を拒絶しているのにアンネローゼは察した。彼女の思いの通り、今のラインハルトを押しとどめ得るとすれば、それはキルヒアイス以外にあり得ない。今回は彼を失うという最悪の事態だけは避けられた。しかし、将来、万一にもそんなことが起こったとするならば……

五〇〇〇有余年にわたるゴールデンバウム王朝の末裔として、虚無の淵にたたずんでいた先帝フリードリヒ四世の姿が、臍に弟の姿に重なるような錯覚が身体の芯まで冷え切るような怯えの中にアンネローゼを誘う。ジークを失うことだけは、決してあってはならない。

「喜んですることじゃありません。でも、やらなければならぬことなんです、姉上」

ほとんど愚痴に近い口調だった。

それが権力を握ると言うことであって、権力に伴う義務を放棄しないことが、あなたをルドルフにしない唯一の道なのです——キルヒアイスはがられば、そう宥めたに違いない。

アンネローゼにはキルヒアイスの真似はできなかったが、ラインハルトの愚痴はあることを思いつかせた。

「そうじゃないの。わたしもジークを迎えに行ってもいいかしら？　ここでじっとしていると気になって……できたら、そのまま病院で付き添っていてあげたいのだけれど？」

「そうですね」

到着してもすぐに集中治療室に入ることになっている状態だから、まだ行っても意味はない、そう言われるかと思ったが、やはりラインハルトもキルヒアイスの病状は最大の懸念だったようだった。ほんの僅か、おとが頤をつまむようにして考え込んでから、ラインハルトが向けた微笑は先ほどの暗さを消していた。

「行ってください、姉上。姉上がついておられるならわたしも安心です。色々、やるが多くて。せめてキルヒアイスが意識を取り戻すくらいまでついていてやりたいんですが」

「ありがたい、ラインハルト、今から用意ができるかしら」

「今からですか？」

ラインハルトは居室の壁を見上げた。すでに深更と呼ぶべき時間帯に入っており、幾らもしないうちに日付が変わる。さすがに眉を顰めたラインハルトだが、それでもはつきりと頷いた。

「キルヒアイスはまだガイエスブルグを出ていませんよ、姉上。二週間はおかると思いますけれど……準備は早い内がいい」

席を立ち、ラインハルトは居間の一角に据えられた通信端末に

歩み寄り、そこに置かれた本の端からはみ出している紙片に気づいた。ラインハルトを待つ間、アンネローゼが読んでいた本だった。

「——何ですか、姉上？」

「あら——？」

某代わりに使っていたメモ用紙だったそれに、帝都内の住所と映画IDでんわばんごうが記されているのに、改めて気づいた。

「え……ああ、これ？」

極く近い過去の記憶を辿って、アンネローゼは該当する記憶のページを探り当てた。

「シュミットバウアー子爵夫人の連絡先よ。子爵夫人が結婚される前に、貰ったのを忘れていたわ」

「シュミットバウアー子爵夫人ですか……？」

ラインハルトの表情も微妙なものになる。アンネローゼはラインハルトと子爵夫人コルネリア・ゲルトルーデ自身から聞かされた以上には、彼らの間の経緯は知らない。彼女の兄がラインハルトの戦友であり、彼女と彼女の夫がラインハルトの敵に回り、戦役の敗北とともに消息を絶ったということ以上には。

「何か連絡がありましたか、姉上？」

「ゲルタさんから？」

子爵夫人コルネリア・ゲルトルーデを、その通称で呼び、アンネローゼは頭かぶりを振る。

「ないわ。最後にあったのが、今年の三月頃かしら……何か気になることもあるの？」

リップシュタット戦役の前には何度か書簡を往復させていさえるのだ。もつとも、戦役が始まると連絡は絶え、その後復活することはなかったのは当然だったが。

「いえ」

気にしないでください——ラインハルトが微笑で表情を消したのを察したが、詮索するつもりはなかった。いずれ政治と軍事に関わることにちがいがなかったから。

「それより……」

微笑を、ラインハルトは消した。

「準備は命じました。到着は一〇月の二五日、朝の八時出発です。

寝過ぎないようにしてください、姉上」

「あなたこそ、眠れないのではなくて？」

初等学校の遠足の前夜、興奮して眠れなくなり、翌朝はみごとに寝坊してしまったラインハルトの手を引いて学校へ駆けつけたことを思い出した。

久々に姉にからかわれ、ラインハルトは照れたように顔をつくりとなでた。姉の前では、帝国の独裁者としての立場など、必要に迫られて着けている仮面以上の価値を認めていないラインハルトだった。

「ちゃんと寝ますよ。ご心配なく」

☆☆☆

オーディン

キルヒアイスが無事に帝都へ生還した。

当初、生命を危ぶまれるほどの出血多量と、ほんの数センチの差で致命傷にならなかった銃創のダメージはやはり軽いものではなかった。帝都に帰還直後にキルヒアイスの容態は急変し、医師団を蒼白にさせた。

この間、アンネローゼはほとんど一睡もせず彼の病床に付き添い続けたが、医師や看護師が『このままでは伯爵夫人ご自身がお体を痛めておしまいになる』と危惧するほどだった。二日目の

朝、アンネローゼからの知らせを受けて駆けつけたラインハルトも、その後、姉と共に親友の傍らに侍し続け、医療チームに極度の緊張を強いることになった。

「こんなことなら、ガイエスブルグから無理に移すんじゃないか」

この時、ラインハルトがそう繰り言を漏らしたという説が、巷間に流布されることになるが、これは俗説として史家の取り上げるところとはなっていない。キルヒアイスをガイエスブルグから移送する判断を下したのはラインハルト自身であり、ひとたび決断を下した以上、ラインハルトが力を注ぐのは判断の誤りへの悔悟ではなく、決断を正しい結果に結びつけるための努力である。同時代の、そしてラインハルトという希有の個性に惹かれるままに、その為人の研究に人生を費やした多くの歴史家の一致した意見がそれだった。

同様に、キルヒアイスの容態についてラインハルトが医師団や看護師のチームを叱りつけ、ために『当時、帝都の帝国軍付属病院は極度の緊張に包まれ、誰もが足音を忍ばせて歩いた。足音の高さが、ローエングラム元帥の逆鱗に触れることを極端に怖れたからだ』……という記録も、ゴシップ誌による勝手な憶測記事に過ぎないとして顧みる者はない。

「キルヒアイスが私や姉上を置いてヴァルハラになど行くものか」

これも、実際のものかどうか裏付けはなされていないが、ラインハルトならば口にしない誰かが首肯する発言である。「大丈夫ですよ、姉上。姉上を残してキルヒアイスが逝くはずはないんです」

実のところ、看病中、ふとアンネローゼが漏らした弱気に、ラインハルトが応じた言葉がそれだった。

一五歳から帝国軍に籍を置くラインハルトであり、この時点での年齢は二二歳。体力的にはまだまだ上昇期にあり、三日や四日の完徹任務など日常茶飯事だったラインハルトに比べると、三日三晩一睡もできない状況はアンネローゼにとって楽なものではなかった。気力はともかくとして、仮眠を取るうにも、今にも容態が急変するのではないかと気が気ではない状況では、自然、眠りはひどく浅いものとならざるを得ない。睡眠導入剤による眠りには無理があり、効き過ぎて睡眠が必要以上の長さになることを怖れれば、その摂取量も中途半端にならざるを得なかった。体力が落ちてくればつい弱気が兆す。アンネローゼが疲労の余りに、ともすれば忍び寄ってくる不安と弱気を言葉にしてしまったとしても不思議ではなかった。

「そうね。ごめんなさい、ラインハルト。益体もないことを言ってしまったわ」

親友への無条件の信頼を示す言葉。ことはキルヒアイスの為人や見識に関わる問題ではないにしても、何の留保もなく親友の生存を確信するラインハルトの言葉は、アンネローゼを頬笑ませるに足りた。

医師たちの努力、アンネローゼとラインハルトの看護と祈り、いずれが通じたのかは定かでないにしても、キルヒアイスは丸三日にわたった昏睡から生還した。

「キルヒアイス、キルヒアイス、俺が分かるのか、俺のことが見えるのか!!」

アンネローゼに向かっては一瞬の弱気も見せなかったラインハルトだったが、キルヒアイスが意識を取り戻したと聞かされた瞬間は体裁も外聞もありはしなかった。医師と、アンネローゼとに制止されなければ、そのままキルヒアイスの身体に取りすがって泣きわめき始めかねない有様だったのだから。

「だめよ、ラインハルト。涙が、ジークに涙がかかってしまうわ」
「……姉上だって……姉上だって泣いてるくせに……」

二二才の公爵……元帥にして帝国軍最高司令長官。帝国最高の権力者にして独裁者……の言葉遣いではなかった。危うく親友を失いかけた孤独な少年以外の何者をも、この時のラインハルトに見出だすのは困難だった。

アンネローゼは慌てて、ラインハルトが涙で汚してしまったキルヒアイスの頬を拭い始めたが、間もなく無駄を悟った。いくら拭いても、キルヒアイスの頬から涙の痕を消し去ることが不可能なことが分かったからだ。

「ごめんなさい、ジーク」

アンネローゼ自身も涙を止めようがなく、そして、キルヒアイス自身も自らの涙で頬を濡らしていたのだ。

「……さま……さま」

ほとんど声は聞き取れなかったが、アンネローゼとアンネローゼを呼んだ声に違いなかった。

「余り負担をおかけにならないで下さい」

見かねたらしい医師が言葉を挟んだ。負傷は肺の一部を傷つけていました。声帯の機能回復も十分ではないのです。これ以上、無茶をなさるならキルヒアイス上級大将の主治医として病室からの退室をお願いすることになりますぞ。

頭ごなしの注意には無条件で反発を示すラインハルトも、医師の小言には素直に首を縦に振った。この際、独裁者を恐れぬ医師の剛直さがラインハルトにとっては快かったという事情もある。

「まだ、しゃべるな!」

だから、叱責は隠し切れぬ喜悦を含んでいた。

「早く身体を治せ……今、俺がお前に望むことはそれだけだ」
「ラインハルト!」

こちらの叱責も、おもわず微笑を含まずにはいられなかった。
「もう、ジークに命令なの？」

「キルヒアイスのことになると思うにそうやってむきになるんですね、姉上は」

何気に頬が熱くなるのをアンネローゼが自覚したかどうか。軽く息をついて、アンネローゼは姉としての威厳を込めて声を張った。

「……今のジークには休息が必要なのよ」

「わかりましたよ、姉上」

ラインハルトは微笑った。もう、さっきまでの泣きじゃくっていた少年ではない。目映いほどの覇気をオーラのようにまとった覇者の姿にアンネローゼは思わず目を瞠った。キルヒアイスが、ジークが無事だった。無事に戻ってきた。ただそれだけのことで、

ラインハルト
弟がこんなにも変わるのか、と。

「俺は元帥府へ帰る。姉上についてもらうから、思い切り甘えていいぞ、キルヒアイス」

「ラインハルト！」

「……姉上、キルヒアイスのことをよろしく。姉上を独占した借りは、あとでたっぷり返して貰いますから」

「からうものじゃなくてよ、ラインハルト……！」

僅かな狼狽。その狼狽がラインハルトのどの言葉から生じたものか不明なままだったが。狼狽を抑え、律動的な足取りで病室を立ち去るラインハルトを見送ってから、アンネローゼは言う。

この三日間、ラインハルトは一睡もせずにキルヒアイスを看病し続けたのだ、と。

「……さま」

アンネローゼが気づいたとき、キルヒアイスはあの柔らかな微笑を頬に浮かべていた。まだ、その頬に血の気はひどく薄かった

にしても、それはもう生命と意思を伴った人間の表情だった。

感じのよい青い目が、まっすぐにアンネローゼを見詰めてくる。その目が、言っているのをアンネローゼは聞いたような気がした。ラインハルトさま一人を付き添わせて、お一人お休みになっているアンネローゼさまではないことを知っていますよ——と。

「……申し……訳」

「しゃべらないで」

そっとその口元に指先を指し付け、掌でまぶたを覆った。幼い頃、熱を出したラインハルトをそうやって看病したことをアンネローゼは思い出すともなく思い出した。

「——!!」

息をのんだのは、半ば以上、セピア色に色あせた一〇歳前のラインハルトの姿と、今、眼前にあるキルヒアイスの顔に、ある面立ちが重なり合うように浮かんできたことだった。一五歳の時、彼女は見出だされ、一〇年余りにわたってその人物を主君と呼び、側妾として仕えた。先帝フリードリヒ四世の病臥に侍したことは一度や二度ではなく、病床にあっても寝ねがてな皇帝を、そうやって眠りの淵に導いたこともごく最近のできごとのように、アンネローゼの記憶の中にあつた。

同時に、アンネローゼの脳裏に『悪夢』が蘇った。新無憂宮の最深奥部、先帝とともに玉座に座す彼女の前に現れるキルヒアイスの姿。

「我と共に来よ、アンネローゼ」

もはや輪郭すら曖昧な生ける闇としか見えぬ皇帝は彼女を差し招く。

「いやじやと申すのであれば、愛しき者を伴うてやろう」

「——!!」

声にならぬ悲鳴はアンネローゼ自身のものだった。彼女の目前で、キルヒアイスは生ける松明と化して白く燃え上がる焔に包み込まれる。

「おやすみなさい、ジーク」

不安定に揺らぐ声の震えをキルヒアイスが悟っていないことを、アンネローゼは真剣に願った。胸郭の中で心臓が狂ったように鼓動を打ち続けているのを彼女は自覚した。

「ずっと走り続けてきたのですもの……おやすみなさい。元氣になったら……みんなで一緒に出かけましょう。どこか……」

ずっと目蓋が落ち、アンネローゼはキルヒアイスが眠りに落ちたことを知った。知って、安堵した。それはキルヒアイスが無事だったことへの安堵。彼が死ななかったこと、自分が彼を殺さずに済んだことへの心からの安堵。思い、アンネローゼは察する。もし彼が、ジークが死んでいたら、彼を殺したのは自分以外の誰もでもない……と。いや、ジークが弟、ラインハルトの盾となって生命を擲（なげ）とうとしたそのこと自体、それは自分がジークに強いたことではなかったのか……そして、自分は彼にそれだけの犠牲を求める、どのような資格があったというのだろうか。

静かに寝息を立て続けるキルヒアイスを前に、アンネローゼは固く両目を閉ざしたまま凍りついたように動かなかった。いや、動くことができなかった。キルヒアイスの無事を目にした喜びは、自分の犯した罪の大きさへの押しつぶされるような恐怖にとって代われ始めていた。

しかし――

キルヒアイスの生還に安堵の息をついたとはいえ、ラインハル

トの半神的なまでの容貌から優秀の色はなかなか去らなかった。ようやく約一ヶ月にわたる半昏睡状態から恢復したとは言え、それで一気に快方に向かうというほどに浅い負傷というわけでもなかったのだ。

一二月、ラインハルトからの諮問に答えてキルヒアイスの主治医は進言する。生命に懸念のある状況はほぼ脱したが、長期の病臥で体力の衰えが著しいため、リハビリテーションが必要であり、その期間は概ね六ヶ月あまりと見積もられる。厳冬期に入る帝都ではなく、より気候の穏やかなリゾート地での療養を勧めたい。

「良い場所があるか？」

「ございます」

主席秘書官の操作で壁面に海岸地帯の映像が浮かび上がった。標高一〇〇〇メートルクラスと思われる山並みの麓から、緩やかな傾斜をもった広大な裾野が、最後には白砂を敷き詰めたような海岸線に達している。海岸に近い一帯には、緑に埋もれるようにして人造湖らしい湖面と、人造の建造物が点在する。見るからに繁華な大都市ではない。

「これは？」

「ラキエンテス海岸です。帝都在住の貴族にはもともと手近なりゾート地でした」

秘書官は過去形で言った。すでに所有者の大半はヴァルハラへの門をくぐったか、あるいはラインハルトによる苛烈な増税に耐えきれず、その所有権を手放しているため、海岸一帯は帝国政府がまとめて接収するところとなっているのだ、と。

「帝都の南、地上車で四時間弱の距離にあります。冬は帝都よりはるかに暖かく、多くの皇帝陛下^{下方}が手軽な避寒地として利用されてきたという履歴もございます」

将来的に傷病兵の長期療養所に転用すべく、改装工事が進めら

れており、リハビリテーション施設を含め療養のための施設も整っている。難があるとすれば、帝都との交通と通信の便があまり良くないことだろう。殊更に人力を使うことを地位と権力の象徴とするのが通弊の歴代の貴族たちは、彼らの別荘地を機械力の利便性から切り離そうとする傾向が強かった。ラキエンテスもまた例外ではない。

帝都との交通路は地上車用の高速道路が一本だけで、現地には空路のための施設がない。通信回線すら、帝都との直通回線が敷設されていないありさまだった。最近やっと新設されたが、容量は不十分である。

「専用の衛星を定置させる計画がありますが、完了するのは六ヶ月後の予定です」

交通網の整備計画もあるが、そちらは来年度以降の実施となる見込みだという。

「海岸の近くだ。いざとなれば戦闘艦を着水させれば良いし、近くに湖水があるなら、シャトルを使うという策もある。それに、衛星回線がすぐに必要なら通信艦を一時的に軌道に入らせれば済むことだ。」

秘書官の危惧をラインハルトは一笑し、医師に視線を転じた。

「どうか？」

「宜しかろうかと考えます」

「では、そのように準備を進めてくれ。フロイライン、細部の手続きを頼む」

「承りました、閣下」

軽く頭を下げる主席秘書官に、さすがに医師が好奇の視線を投げる。くすんだ金髪を少年のように短くし、襟元のスカーフ以外は帝国軍士官の服装と変わるところはないが、彼女が年若い、おそらくラインハルトとほとんど年齢の違わない妙齢の女性である

ことは隠しようもなかった。かつ、彼女がラインハルトと肩を並べてもわずかの遜色すら感じさせないほどの美貌の所有者であることも。

医師の記憶によれば、前回、ローエングラム元帥と面会したときの副官は男性で、余り気の利かない、どちらかと言えば元帥の顔色ばかりうかがっているような士官だった。名前は……確かフエルデベルト。

ラインハルトは、医師の不審顔に気づいたらしい。

「フロイライン・マリィンドルフ。先日から帝国宰相主席秘書官を務めてもらっている」

「……では、マリィンドルフ伯爵家の？」

「ヒルダと申します、先生。よろしくお願いいたします」

あるかなぎかの微笑を口元に浮かべると、女性らしい香気が閃き、医師はつかの間、視線を吸い寄せられた。

今日は眼福な日だ。ローエングラム公だけでも目の覚める思いがするのに、あれはまるで……そう、女神ミネルバのような美人ではないか。

一瞬の埒のない思いを、しかし医師はすぐに脳裏から追い出した。彼には彼の職務があり、ローエングラム公のもとで評価を受けたければ、職務への精励以外にすべはないのだから。

こうして、リップシュタット戦役の終結を告げた『ガイエスブルグの惨劇』から三ヶ月が過ぎた。